
RとNのカアディスからの手紙（106）

2006年5月19日

先週の（105）は如何でしたか？ 全ての方に文字化けせずに届くといいんですがやはりまた文字化けした方があったようです。 困りましたねー。

「続・メディーナ・シドニア」の巻

さて、先週に引き続き山の町 **Medina Sidonia** です。 バス停から一時間弱で観光案内所へ。ソコが市街地の最高地点で、その上には教会とカトリック教徒の城があり、更にその上にはムーア人かローマ人のものらしい遺跡が散在しています。町の観光案内パンフにはそれらの遺跡についての説明はなく、あれこれ推測するしかありません。



教会の横手から急坂を登って裏側に出ると、そこにはもう人家はなく、野草が咲き乱れる草原にローマ人のものらしい遺跡がポツポツ散らばっています。ここは山の頂上まであと一息という所。左端の城はムーアを追い払った後、多分ムーアの城を取り壊してその基礎の上に作ったと思われるカトリック教徒の城。



教会の裏から山の頂上目指して登ってゆくと、あちこちに遺跡が散らばっています。勝手な思い込みかもしれませんがムーアの遺跡は日干し煉瓦を積み重ねて固めたものが多く、ローマ人のものは石積みが多いような感じ。だからこれらはローマかな？





これがメディーナの頂上。たまたま山の頂上にこんな大きな岩があったのだろうか、と不思議に思って良く見ると、明らかに人工的な部分もあります。どこからどこまでが人工のモノかコレだけ風化してしまうと良く分かりません。

頂上の標柱には町の名前が彫りこまれていて、初めは故事来歴でも記した銘板があったのだと思いますが、ここのも心無いイタズラで跡形もなし。ペイント・スプレーによるイタズラがなかっただけマシと言うもの。町も新たに付け直す気は無いらしい。

この手の遺跡はアンダルシアのいたるところにあって珍しくもないのですが、ここでは思い切って自然のまま、殆ど保存しようという意図が見えません。道らしい道もない山の上だからでしょうが、こんなことでイイのかナーとってしまいます。

バス停から観光案内所までの道でも、観光客はおろかこの町の住民にもごく少数しか出会わなかったんですが、教会より上は全く無人。ピクニックにはもってこいのコンディションです。そこで今日のオベントはこの最高地点でということにしました。

そうそう、また観光案内所に苦情が一つ。ここの案内係はオネーさん。特に無愛想ではありませんでしたが、帰りのバスを確かめたらコレがマタ極めてあやふや。結局私達が持っていた情報のほうが確かだと知りました。観光案内所というところは、地図を貰って、向うが言うことをおとなしく聞いておくだけに限るようです。

観光案内所の設置場所がバス停から小一時間も坂を上った町の最高地点であることは彼女の責任ではありませんが、案内所の人間ならバスの時間を聞かれて、自分がそれを知らなかったらバス会社に電話で問い合わせ位の親切心は持って貰いたいですね。

彼女自身が乗らないバスのことなんか知らないで当然か？
一般に町のヒトは何か聞くと(内容の信頼性はともかく)実に親切に色々教えてくれるのに、観光案内所はえてしてこんなところが多い。お役人だからかな。バス停にも標識などはなく、勿論時間表などある筈もなし。バス会社もバツ。大バツ。

*



この上下の写真は頂上から南東及び北東を見たところ。頂上の大岩の更にテッペンによじ登っていつものミニ・クロワッサン・ボカディーヨ。山上の澄んだ空気の中でのセルベサはマタ格別。下界のノドカナ景色もまことに結構。牧草地に植えられているのは樅か？オリーブか？ 樅ならドングリを食べるイベリア種の黒豚がいるのかも。



この辺一帯の酪農地帯はルータ・デ・トロ (**Ruta de Toro**=闘牛の道) と呼ばれたらしい。上の二枚のうち下側の写真の中央はヘレス(**Jerez**)に通じる道路ですが、昔の牛飼いや闘牛用の牛を引いていった古くからある道なのでしょう。

*

テッペン岩の標柱のすぐ脇にはこんなものがありました。直径約1.5メートル。深さは3メートル弱。 想像の域を出ませんが、これは多分貯水槽だったのではないかと思います。そして、この周りには色々構造物があったにせよ、少なくともこの部分は自然石をくりぬいたもののように見えます。 やっぱり山の頂上に偶然巨石があったのでしょうか、そしてそれ利用して砦を築いたのでしょうか？



しかし、この貯水槽にどうやって水を貯めたのか？ 降水量の大きい地方なら周囲の構造物の屋根から集めれば簡単に満たすことができるでしょうが、この地方では冬以外の季節に貯水できるような雨は期待できません。

まあ、ローマ時代の話ですから奴隷はいくらでも居ただろうし、水は麓の泉から運び上げていたのでしょう。この山の斜面には泉が何箇所もあります。こんな所に？と思うような、山の中腹より高いところでも湧き水がある。 だからこそ、こんな山の上に集落が出来るんですね。なかには岩塩層から湧き出るらしい塩水の泉もあります。

教会のすぐ上には現在の水道のための貯水タンクがありました。必然的に人家はそれより下にあり、頂上付近は自動的に自然保護区になっているわけですね。

だから、あえて遺跡の保存措置もされていないのかとも思いますが、銘板を取ってしまうような心無いイタズラをするバカモノに対しては無防備です。

*

この日は視界があまり良くありませんでした。この山からは、はるかにカアデイス海湾 (Golfo de Cádiz) 即ち大西洋が見渡せる筈なのですが、全くダメでした。2枚目の写真が海の見える筈の西の方角を向いたものです。1月末だということにまさに春霞。

*

去年の秋頃から、どこへ遠足に行っても、どうもいい視界に恵まれません。この間のトラファルガルは殆ど唯一の例外です。カアデイスの部屋から見る水平線もすっきりしない日が多いのです。カアデイスの今年の冬は雨模様の日が随分多かった印象があります。テレビでは早くも各地の貯水量の少なさを報じています。異常です。

*

山の上の遺跡群の中で保存の対策をしているものを一つだけ見つけました。この通り鉄骨のツッカイ棒をあててワイヤーロープで引っ張っています。急傾斜の下には人家もありますから、遺跡の保護というより落下の危険防止の意味が主でしょうね。



*

次の二枚は帰りのバスの車窓から。とにかくもう、のどかノドカの一点張り。バス停では随分待たされました。来た時はメディーナ止まりでしたが、帰りのバスはもっと内陸の村が始発のもので、例によって大幅に遅れたのです。でもまあ、イカラズ、騒がず、バスが遅れたぐらいでぎゃあぎゃあ言っちゃあこのノドカな風景に申し訳ない。



*



緑の絨毯。初めにも言ったようにこれは1月末の頃でしたが、この地には「冬枯れ」という言葉はないみたいです。抜けるような青い空がなかった代わりにこの日は緑を満喫しました。カァデイスには空の青、海の青だけで、緑はないですからね。

「三度目のタルヘタ」の巻

先日、三枚目のタルヘタを貰いました。タルヘタ *tarjeta* とは色々な「カード」のことですが、この場合はタルヘタ・レシデンシア *Tarjeta Residencia*=居住許可証のことです。文書での居住許可は3月末日に既に発効で今回は許可証が出たのです。

前回の許可期限は今年1月7日まで、私達が更新申請をしたのが去年の11月半ば。許可文書が出て指紋押捺をしたのが3月末日、そして許可証受け取りは5月15日。申請してから丁度6ヶ月後でした。よほど厳しい審査があったのか？ イエイエ。

最近の日本語新聞によると、「政府は労働・居住許可証更新の手続きの簡略化を図るため郵送による新方式を導入した」そうです。「期限切れの60日前に行政省から各人に通知と更新申請書（既定事項は印刷または記入済み）が届くから、必要に応じて訂正または追記入したうえ、必要書類を添えて郵便局または移民局、市民登録所に提出すればよい」だから「長い行列を作って窓口で待つ必要はない」のだそうです。ホントカイナと思わざるを得ません。

審査の内容が単純である筈の年金生活者でさえ6ヶ月を必要としたんです。労働・居住許可ともなると申請者本人の審査だけでなく、雇用者、雇用条件など、審査の内容はさらに複雑になります。考えただけでも、もっと日にちが掛かる筈。申請者にとって新制度の最大のメリットは、出先窓口の担当者一人一人の勝手な考えで、申請に必要とされる添付書類が変わってしまう、なんて事がなくなる点です。

*

そして、「行政省では、審査のうえ本人と雇用者の双方に更新の可否を郵送で通知する」となっています。いよいよもってホントカイナです。でもヤッパリちょっと心配な部分もあると見えて、「行政省からの可否通知が届くまでは現存の許可証は（期限が切れても）有効とする」トメモ間に合わないことを自ら認めているようです。

アフリカや東欧から出稼ぎに来る外国人労働者にはコレだけの行政サービスをするのに、逆に外貨をそっくり落としてくれる年金生活者の方にはなんにもサービスなし、とは片手落ちではないか。まあ、年金生活者だって招かれてきたわけではないからその点では出稼ぎと差はありませんけどね。

私達は期限を自分でチェックして、必要書類はその都度お役所にお伺いをたてて、行列を作って書類提出、指紋押捺も何度も足を運んでマタ行列。こうしてヤット6ヶ月後にタルヘタを手に出れたのです。おおきな違いです。ただし、私達は上記の新制度が本当に機能しているのかどうか、おおいに疑問を持っています。

なぜなら、タルヘタを貰ったその足で、永久帰国の際の手続きを聞きに行政省の出先機関に行ったら、やはりそこは去年11月と全く同じくらいの混雑でした。なんにも変わっちゃいないんです。カアディスの場合は、外国人労働者が入り込む業種がごく限られているし、外国人年金生活者も少ないから長蛇の列とまでは行きま

次の ATLANTICO DOS 8 もデタラメ。8 は番地ですから建物の名前につけるんじゃないなくて「通りの名前」につけてくれないと困ります。まあ、この住所では手紙が正しく配達されることはまずないでしょう。部屋番号も抜けてるしね。

*

こんなことをクドクドと言った理由、実はこの住所は前のタルヘタでも全く同じように間違われていたんです。ということは、これを作った係官は前のタルヘタを発行した時の資料を丸写ししたんですね。要するに前回は私達が提出した申請書を「よく見ない」で間違え、今回は更新申請書など「全く見ていない」んじゃないか。

私達は勿論前のタルヘタの間違いは承知していました。だから更新申請書でも特に念を入れたつもりだったのですが結果はこの通り。いったいこんなことで本当に私達の審査をしたのだろうか？ 6ヶ月もかけてナニを調べたのか？ 多分何にも調べないで、機械的に前のおりのタルヘタを発行したんですね。正に「スペインのお役所仕事」6ヶ月も要したのは事務処理のスピードが遅くて仕事が多まっただけ。

でもこの間違いを指摘して訂正してもらおうつもりはありません。だってそうすれば改めて申請書を提出してまた6ヶ月も待たなければならない、その間に私達は帰国するかも知れない。無意味です。私達が間違えなかったことは申請書コピーをがっちりとしてあるからいつでも証明できます。（これはワガ社会保険庁のミスで年金をとめられた事件で得た教訓、お役所に提出した書類は必ずコピーをとっておくこと）

それに私達も実はこんな間違いどうだってイイヤ、になってしまっています。アートの国の人に事務処理能力を要求するのは「コク」というものでしょう。

そして、裏面の真ん中辺に NO AUTORIZA A TRABAJO と書いてありますが、これは行政省にとっても私達にとっても重要事項。「就労不許可」です。つまり、私達は働いてはいけない、毎日遊び暮らしていることが必要なんです。不許可、結構。***

17日パリで行われたUEFAチャンピオンズ・リーグ決勝戦でバルセロナがアーセナルを見事2-1で破りスペイン・リーグ優勝とのダブル優勝を決めました。先のセビージャのUEFAカップ優勝とでスペインのチームが欧州2冠に輝いたのです。もっとも、スペイン・チームとはいえ半分以上外国人選手なんですからあんまり威張れませんが、スペイン・リーグのレベルの高さは証明できたわけですね。

ところが、カアディスの地元チームは前期、念願の一部リーグ昇格を果たしたというのに、もろくも一期限りでまた二部に降格決定です。セビージャもバルサも勝って泣き、カアディスの選手・サポーターは負けて泣いていました。
